二〇一五年一一月二〇日

破蓮の影を崩して鯉過ぎる　三刀
野遊びの一人が転ぶ縄電車　よし女
冬ざれや玻璃のごとくに山の池　菜々

二〇一五年一一月一九日

茶室へと紅葉散り敷く小径かな　明日香
磴はいま万華のごとく紅葉敷く　よう子
遠山の水墨画めく時雨かな　さつき

二〇一五年一一月一八日

靴沈むほどや深山の落葉嵩　明日香
鈍色の水面に疎なる枯蓮　ひかり
屋根越えて皇帝ダリア孤高なる　智恵子
広前で諍ふ猫や神の留守　満天
木洩れ日に水面かがよふもみぢ川　菜々

二〇一五年一一月一七日

日向ぼこしつゝ舌頭千転す　満天
師を悼み句碑に集ひし冬帽子　宏虎
黄落のまつ只中に車椅子　はく子
偲びつゝ遺句集を繰る夜長かな　よし女
石仏の頬を染めたる照紅葉　泰山
堰落つる水の階段冬日燦　菜々
花名札確かめ巡る苑小春　明日香
冬空を歪めて手打ガラス窓　ひかり

二〇一五年一一月一六日

幼らの伝言ゲーム日向ぼこ　さつき
谷川を埋む紅葉の七重八重　泰山
小春日や寄り来て丸き鯉の口　よし女

二〇一五年一一月一五日

野路の秋ドライブ兼ねて蕎麦食べに　あさこ
餅撒いてふるさと祭り果てにけり　三刀
幼顔して目高見る卒寿翁　よし女
山神へ丁目石ある登り口　智恵子

二〇一五年一一月一四日

冬の蝶峡の薄日に見失ふ　菜々
大聖堂ミサの祈りの声冴ゆる　治男
木の葉髪訥弁なれど聞き上手　宏虎